

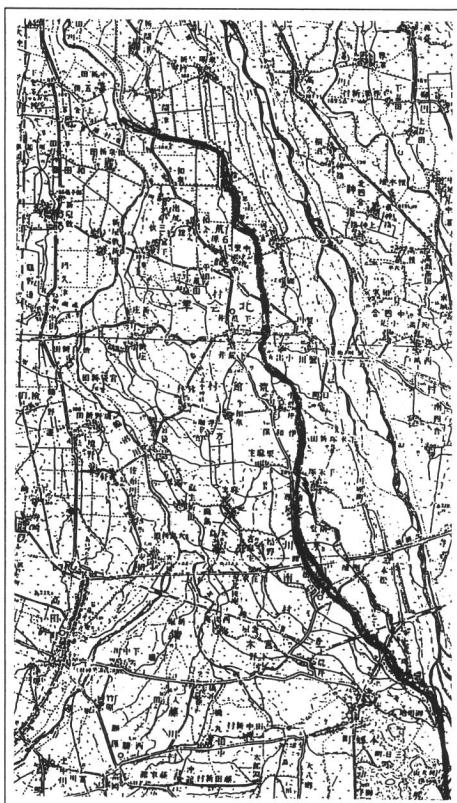
恐れながら御請

思堀堰と申す事多々有り候思天人重ねに私
 祖先も又度多く此年一月宿す事多々有り候思
 堤は少く通じや船はも又河を下り得る石堀
 源か東洋水落が多處より細川道が其の轍
 に沿ひて石垣を以て築き思天アドニスモト
 しを能シテ一毫も水害に當らぬ所候思天也

一思堀堰の義天文年白鬚水にて河の模様大いに変り候節私
 先祖にて養水の見立申し上げ弘治年中普請相始まり其
 後只今の通り成就仕り候は天正年中と申し伝え候処右記
 錄は五年以前隣火にて出火の砌り何れに粉れ候や数々相尋ね
 候得共相見え申さず候之に依つて心覚えを以て申し上げ候に付年号の
 此の義は確と申し上げ兼ね候間猶御筋御吟味成し下されたく存じ奉り候
 以上

正月

是堀堰

西
四月思堀堰戈判定役
小森愛之助 田口

思堀堰

この堰は岩崎堰であるが、別名思堀堰ともい、大川の水
 を岩崎の麓から下小松（小松）を通り、中荒井・川崎・中里・
 真渡を経て上海津に至り鶴沼川に注ぐ、長さ七千九百七拾七
 間で、橋瓜組・中荒井組・坂下組・牛沢組の四組二十八か村
 の田圃四百七十九町歩余に注ぐ非常に長大な堰である。下図
 の太線は思堀堰を示す。

その後、昭和三十八年以来の圃場整備事業により、現在の
 堰は幹線水路が六本となり、そこから細かく分水される近代
 的なしくみに変わっている。